

1 社会科における「一人一人が問いをもち追求する姿」

附属学校園社会科の研究では、思考力・判断力・表現力を育成するためには、子ども同士が学習課題に対する自分の考えをもつ必要があり、そのためには2度の「学び合い」を実施する単元構成が有効であることが分かってきた。そこで、今年度は「学び合い」の課題となる「問い」の創造を研究し、探求し続ける子どもの育成を図ろうと考えた。

私たちの考える社会生活を豊かにする「問い」とは、普段のくらしや生き方を考える機会になる「問い」である。このような「問い」を創造し続けることで、子どもは自ら課題を追求する意欲が高まり、社会的事象を自分のこととしてとらえることになるであろう。普段のくらしや生き方と結びつけながら課題を探求すれば、様々な疑問が「問い」として次々に生起し、一人一人が解決したい「問い」をもつことにつながると考える。

そこで社会科では、次のような子どもの育成を目指すことにした。

- 社会とのつながりの中から様々な「問い」を創造し、社会的事象を自分のこととして、探求しようとする姿
- 社会的事象と自分との関わりを明確にして振り返り、これからの自分のくらしや生き方につなげていこうとする姿

昨年度、附属小学校5年生で行った「米づくりにたずさわる人の思いを探ろう」の授業では次のような子どもの姿が見られた。

単元の導入では米づくりにたずさわっている人をゲストティチャーとして招き、米づくりにかける思いや願いを聞くことで、子どもたちは米づくりについて様々な疑問をもつことができた。そこから、「米づくりにたずさわる人々は、米づくりにおいてどのような工夫や努力をしているのか。」という単元を貫く学習課題を設定した。社会とのつながりに気付くとは「毎日米を食べているけど、その米はいろいろな工程を経てたくさんの工夫や努力でつくられているんだ。」という米づくり農家の工夫や努力、米のつくられ方に注目することである。そして、「今日の米づくりは農家の高齢化、後継者がなく耕作放棄地が増えてきているという様々な問題に直面している。」という社会的事象を通して、子どもは「たいへんだ、このままでは米を食べることができなくなる。なんとかしなければいけない。」と自分のこととしてとらえ、どうすればよいか考えようとする。そして「自分は米を毎日のように食べている。その米をつくっている米づくり農家で様々な問題が起きている。その問題を解決するためには、米づくり農家同士が協力して農業機械を共同で利用したり、米の消費量を増やすために米づくり体験を行いたくさんの人に米づくりを身近に感じてもらう。」と考え、さらに「自分も米をたくさん食べるようにして米の消費量を多くし、米がもっと売れるようにする。」と米づくり農家と自分との関わりをはっきりさせる。このように考える中で、自分とは違った「価値観」に出会った時、子どもは「消費量を増やすだけでは、後継者問題は解決しないのではないかな。もっと別な方法はないのか。」という問いが浮かび、探求を続けていった。私たちは、このような子どもを育成していきたいと思っている。

子どもが社会生活を豊かにする「問い」を創造するには、自分のくらしや生き方につながっていると感じる単元を貫く課題を設定することが大切である。つまり、子どもが社会的事象を通して、自分を取り巻く社会と課題のつながりに気付くことが重要になる。自分と社会とのつながりに気付

けば、子どもは社会的事象を他人事のように見るのではなく、自分のこととしてとらえ、分かろうとする。自らの知識や体験、学習内容を活用し、社会的事象を見つめ直し、「問い」をもつ。この「問い」を解決したいと考えるであろう。

また、社会的事象と自分との関わりを整理することで、より「問い」をもちやすくなるのではないだろうか。さらには社会的事象とのかかわりが明確でない子どもが、関わりを明確にして授業に向かうことで追求する意欲が高まると考えられる。一人一人が「問い」をもつために、一人一人が社会的事象と自分との関わりを明確にしなければ、知識や体験は活用できない。そう考えると、「問い」を追求しながら、自分と社会とのつながりを模索し、社会的事象との関わりを明確にするふりかえりを行っていかなくてはならない。

2 「一人一人が問いをもち追求する姿」を求めて

附属学校園社会科では、次のような方法で目指す子どもの姿に迫ろうと考えている。

- 子どもが自分のくらしや生き方につながっていると感じる単元を貫く課題を設定する。
- 子どもが「問い」を創造し続けるよう、課題解決の過程でも常に社会的事象に向き合えるよう体験を取り入れたり、資料の工夫をする。
- 単元の節目に、社会的事象と自分との関わりに気づき、深めるためのふりかえりを実施し、子どもの見取りをする。

単元を貫く課題や毎時間の課題は、野外調査などの体験活動や、史料、統計資料などとの出会いなどから子どもの疑問を引き出し、学習指導要領の目標を踏まえ整理して設定していく。また教師は、子どもの課題解決の過程においても、社会的事象に出会う仕掛けをし、その社会的事象を通して、子どもに社会を見せる工夫が必要である。子どもが社会的事象を通して、自分に関わりある社会を見てこそ、課題は「問い」に変容し、自ら理解しようとすると考えられる。そして、子どもが社会的事象をある観点で見た時の社会を予想し、別の観点で見ることができる体験や資料を用意することで、さらに「問い」をもち、社会のしくみをより広く深く探求できると考える。

すべての子どもが学習していく中で、社会的事象と自分との関わりを理解しているか教師が確認する。また、社会的事象と自分との関わりが目標や内容に適しているかを判断する。方法として、ふりかえりの仕方を検討することが必要となる。もちろん目標に対する教師のふりかえりは子どもへの支援に使うためにも大切であり、子どもにとっても自分がどれだけ目標に迫ることができたかという到達度を知ることは大事である。しかし、今回のふりかえりには、それらに加えて社会的事象と自分との関わりに気づき、深める要素を盛り込む必要がある。目標を吟味し、社会的事象との関わりに気づき、深めることができれば、子どもは自然に「問い」をもつようになる。それは、社会に生きる子どもたちの経験知や体験知、新たな学習内容が活用できるからである。

最後に、社会的事象には、一つの姿や法則などにまとめられない複雑さがある。社会に生きるという営みは、その時、その場所で生きていく人々が、状況に応じた解決策を導き出してきたはずである。そこに根付いて生きる人々の努力と工夫を想像して、資料をもとに探求していくこと、簡単に答えが出ないことを子どもたちが教室や他のフィールドで考えていくことに、社会科の楽しさがあると考えている。

(文責 岡田 昭彦)